

一つの地球で  
暮らせる社会

ECO PROJECT

「沖永良部島は未来の  
ショールームだった??!!」



# 2024.05.20 南海日日新聞 談論より

地球村研究室 代表 石田秀輝

(一社) SuMPO理事長  
東北大学名誉教授  
星槎大学特任教授  
酔庵塾塾長

地球環境問題は喫緊の課題であり、厳しい順から「生物多様性」「チツソの循環」「気候変動(温暖化)」「マイクロプラスチック」の4つの課題に2030年頃までの具体的な対応が出来ないと文明崩壊の引き金に手を掛けることになる。例えば、最大の問題である生物多様性の劣化を例に挙げれば、この27年間で世界の昆虫の76%が失われたという。物理学者のアインシュタインが亡くなる少し前にこんなことを言っていた、「もしハチが地球上からいなくなると、人間は4年以上は生きられない。ハチがいなくなると、受粉ができなくなり、そして植物がいなくなり、そして人間がいなくなる」。まさに今、自分で自分の首を絞めるべく、世界はこの方向に向かって全力で走っているのだ。

なぜ、このような矛盾を起こしてしまったのだろうか？ それは、「人間活動の肥大化」に原因がある。ちょっとした快適性や利便性を飽きることなく追い求めた結果である。快適性や利便性を得るためには装置が必要だが、その装置をつくる時にも使う時にもほぼすべてを地下資源や化石エネルギーに頼っている。資源やエネルギーを搾取するために穴だらけにしてしまった地球を自然は常に修復してくれるのだが、搾取が修復を超えてしまった結果が今の地球環境問題なのである。



沖永良部島はビーチクリーン活動も盛ん。みんなでマイクロプラスチック問題に向き合っています。



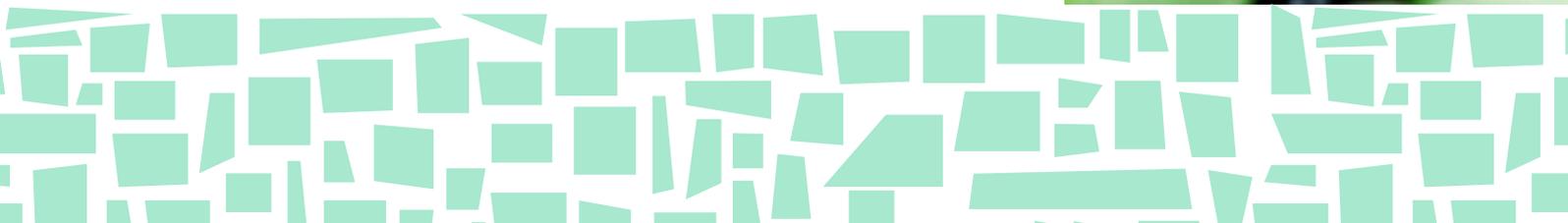


4つの課題各々に対処することは、無論否定しないが、本質は自然の修復能力以下、すなわち1つの地球で暮らすということである。では現在いくつの地球で暮らしているのだろうか？ 世界中の人々が日本人と同じ暮らしをすると地球が2.8個必要(エコロジカル・フットプリント)だ。無論地球は一つしかない。したがって、一つの地球で暮らすということは現在の約4割(1/2.8)で暮らさなければならないことになる。

「一つの地球で暮らせる社会を描く研究所」を4月に東京で開所したばかりであるが、その準備会議で、失ってはならない日本の文化を色濃く残す沖永良部島の人たちは、いくつの地球で暮らしているのだろうかという話になった。それは早速調べねば、ということで、20代から80代の方々に御協力を頂いた。調査には10カテゴリー55項目の家計簿をつけて頂き、その支出額から二酸化炭素(換算)排出量(以下排出量)を算出する方法(3EID)を使った。対象は14世帯で2月の1か月という短期間ではあったが、無職を含む1-3次産業世帯の排出量は880kg(日本の世帯平均1829kg)で、すでに地球1.2個で暮らしているという結果だった。

島の人たちが爪に火を点す様な暮らしをしているわけでは無論無い、日本の平均世帯人数が2.25人で、島は2.17人であることから家族形態もそれほど大きく影響しているわけでは無い。食料やその他の排出量もすべてが全国平均を下回っているが、圧倒的な差はエネルギー消費(ガソリン、プロパンガス、電気)にあった。全国平均の約30%しか消費していないのだ。

無職の高齢者が人口の33%を占め、その排出量が507kgと低いこと、高齢化率が39%(日本29%)であることは影響していると考えられるが、それが全体を大きく引き下げているとは言えない。また、支出額が大きくなれば排出量は大きくなるが、20万円ほどで頭打ちの傾向も示す。





サンプル数が少なく、期間も短く断定的な結論は出せないが、最大排出量世帯でも全国平均を下回っており、今回の測定はかなり現実に近いものだと考えている。少なくとも、一つの地球を下回る環境負荷で暮らしている方が多くいらっしゃることは、極めて重要な結果だと思う。

なぜ沖永良部島の暮らしが、これほど低環境負荷で成立しているのか、まだ検討中だが、少なくとも小さな循環が影響していることは間違いない。どこに出掛けるにも車という生活ではあるが、島自体が小さいためそれ程の距離を乗るわけでは無い。これも小さな循環の一つだろう。また食糧、特に野菜などの負荷も少なく、お裾分けという循環も影響しているのではないかと思う。

ともあれ、日本の平均値の半分以下の環境負荷で当たり前に暮らせる社会があることは、何とも誇らしい。日本、いや世界が目指す憧れの暮らし方が、沖永良部島にあることは、大いに自慢すべきだろう。

現在、島で進めているエネルギーの循環に加え、今後、食の循環や多機能小規模自治によるコミュニティの活性化が進めば、地球一つ以下での暮らしも達成可能だ、そんな島に住んでいることを、子供たちも含めて大いに自慢するキャンペーンでも考えては如何だろう。

執筆者プロフィール：石田 秀輝/HIDEKI ISHIDA

地球村研究室 代表・東北大学名誉教授・星槎大学特任教授・(社)サステナブル経営推進機構理事長・酔庵塾塾長・ものづくり生命文明機構理事・アースウォッチ・ジャパン理事・ネイチャー・テック研究会代表。

地質・鉱物学をベースとした材料科学を専門とした研究者。「人と地球を考えた新しいものづくり」を提唱し、社会人や子供たちへの環境教育にも注力している。

将来の厳しい地球環境制約を想定し、その中で心豊かに暮らせるライフスタイルを描き、その社会実装の場として2014年4月に沖永良部島に移住し、島人と持続可能な島づくりのための『酔庵塾』を開塾している。

◆近著(一部)

『持続可能な発展に向けた地域からのトランジション』環境新聞社(2023)分担執筆

『2030年の未来マーケティング』ワニプラス(2022)

『危機の時代こそ 心豊かに暮らしたい』KKロングセラーズ(2021)

『バックキャスト思考で行こう!』ワニプラス(2020)

『ありがたーい生き物たち』リベラル社(2019)

サステナブル経営推進機構(SuMPO) <https://sumpo.or.jp/>

酔庵塾HP <http://suianjuku.com/>

地球村研究室ブログ <https://ameblo.jp/emileishida>

すごい自然ショールーム <http://nature-sr.com/>

